

「涙を垂らした神」が教えてくれた事

グレイまや

私はこのタイトルに魅かれた。神が涙をたらすなんてどんな話なのだろう。だが、この本を読むことで、私の世界観が大きく変わった。

主人公のノボルは六才で、開拓農民の母親を助ける為、小さな妹を背おって面倒をみる優しい子供だ。ノボルの着ているぼろの袖を鼻水で光らせている様子から、貧しい生活をしている事がわかる。

今まで一度も物をせがんだ事のないノボルが、初めて二銭のヨーヨーを買ってほしいと母親にせがんだが、貧しい母親には、それに応える事が出来ない。しかし、ノボルはなんと自分で立派のヨーヨーを手作りし、母親を驚かすのである。

ノボルは強い。そして優しい。それが一番最初に思ったことだ。

この強さというのは我慢強いという事だ。自分が六歳の時にこんなふうには我慢が出来たかわからない。小さくても、家が貧しいことを理解していたのだろう。そして、ノボルの優しさは母親への愛情だと思う。自分が遊べなくても文句も言わず、親の手伝いをしている姿を自分と比べて、つい文句を言ったり面倒くさいと思ってしまう私は、とても恥ずかしい。

作者であるこの母親の気持ちを考えて見れば、とても辛かったと思うし、二銭をあげられず、母親としてなさけなかったと思う。当時の二銭では、キャベツ一個、大きなあめ玉十個、小鯛を十五匹買ったのだ。それは生きる事や子供を死なせない事がヨーヨーよりも大切だとわかる。

今年の夏、日本から祖母が私たち家族に会いに来た。今年八十歳になる祖母は、この話の時代の三年後に生まれている。祖母は幼少時代、岩手県で疎開をしていた。生活はとても貧しかったときいて、私はノボルと祖母が同じように感じた。

ご飯を増やすために、芋や昆布をご飯に混ぜる「かでめし」という物を何年も食べたと言っていた。

私はその時代の事を想像してみた。お菓子やおもちゃがなくて子供達は悲しかっただろうか。ご飯まで増やして食べないといけない状況は辛かっただろうか。

私の祖母は当時をふりかえりまわりも皆貧乏だったから、それが当たり前だと思っていたと言った。確かに、ノボルも物のない生活でも悲しまず、楽しそうにも感じる。それは私の祖母が、

「まわりも貧乏で、誰とも比べる必要がなくて、競争もなかったから、ある物にだけ感謝して生活できて、毎日楽しかったよ。」

と言った事と同じだと思った。

私は国語の時間に読んだ森鷗外の高瀬舟を思い出した。高瀬舟に乗って島流しにされる罪人の喜助が、どこか幸せそうに楽しそうに見えたというシーンだ。喜助は、先の貧しい生活に比べれば、金や食事の心配のない島流しのほうが楽だと思ひ、人間は足るを知れば幸せだと言ったのだ。

私はここで「知足」という言葉に出会った。「知足」とは吾唯知足という釈尊の言葉であり、人は欲望を無限に膨らませてはならないという教えである事を知った。ノボルと母の生活はまさに「知足」であつたと思う。それは、現実を受け入れて、不満を持たなかつたからだ。

しかし、現代に生きる我々はどうかだろう。あり余るほどの物に囲まれていても、欲深く、心が休まらないと思うこともある。次から次へと新しい物がほしくなり、手に入らない事で不安がつる事もある。

私の祖母も、知足を知っていたから、貧しくても楽しい日々だったと気がついた。祖母もある物に満足し、日々一生懸命生きていたのだと思つた。

私は以前学校でステージチャレンジという演技の大会に出たことがある。八分間という限られた時間の中で演技をして観客にメッセージを伝えるのだ。私たちは貧困の国で起こる差別をテーマに、何週間も練習を重ねた。

裕福な国の人々は、今ある物に満足できず不満を言う。しかし、貧しい国の人々は何もない中に小さな幸せを見つけては喜ぶ。それはまるで、ノボルのヨーヨーだと思つた。

私は、ステージチャレンジの貧しい少女の役を通して、まるで本当に苦しい状況に自分がいるような悲しみを味わつた。だからこそ貧しいくらしの中で、今いる現状を受け入れ、多くをほしがらず、たくましく生きるノボルの気持ち想像することが出来る。

何もない所からヨーヨーを作つたノボルを、母は誇りに感じたと思ふ。まるで神のような神々しい存在に思つただろう。なぜなら、暗いどん底と思える人生の中に、物作りを通して光を見つけたからだ。

この本は私に大切な事を教えてくれた。一つ目は、今そこにある物、ただそれだけに感謝し、満足して生きる事だ。そうする事で、日々の生活がとても楽しいものになるはずだ。二つ目は、もし現状に満足出来なければ、幸せを自分で作る事が大切だという事だ。ノボルの作つたヨーヨーはまさに、自分で勝ち取つた幸せそのものだと思ふ。